



(文化財愛護シンボルマーク)

国見町発掘調査速報（第2号）2003.08

国見中部地区（土黒地区）圃場整備関連
ほじょう

文化財愛護シンボルマーク

このシンボルマークは、ひろげた両方の手のひらのバーンによって、日本建築の重要な要素である手作（組みものの）のイメージを表わし、これで三つ並むることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

いしはら いせき や ふさ いせき はっくつちょう さ 石原遺跡・矢房遺跡の発掘調査



矢房遺跡古墳時代住居跡出土品より

「およそ1,500年前に使われていた土器」

2000年～2003年の調査結果

長崎県国見町教育委員会

☆☆☆ 発刊に当たって ☆☆☆

○本冊子は国見町土黒所在の石原遺跡・矢房遺跡に関する簡易な解説を目的としています。
 ○内容は平成10年度から行っている圃場整備事業に伴う石原遺跡・矢房遺跡発掘調査の成果です。
 ○本冊子に関する問い合わせは国見町教育委員会までお願いします。

いしはらいせきやふさいせきはっくつりゆう 石原遺跡・矢房遺跡発掘の理由

★国見町には百花台遺跡や十園遺跡以外にもたくさんの遺跡があります。「遺跡」とは、私たちの祖先が暮らしていた当時の、住居跡や生活用具(土器や石器)などが発見される場所、すなわち「私たちの祖先の暮らしの痕跡が残されている場所」のことです。この「遺跡」から発見された「土器・石器・住居跡」などは、私たちの祖先の歴史そのもので、ひいては現在生きている私たちの歴史でもあります。発掘調査を行うと、私たちがどのような歴史をたどって現代まで生き抜いてきたかわかります。このような「遺跡」は大切な歴史遺産であり、私たちみんなの財産といえるでしょう。

国見町では「遺跡」が存在する場所で、しばしば工事作業が行われます。今回の石原遺跡・矢房遺跡の調査は、圃場整備事業の工事によって遺跡の一部が消滅してしまうために、その部分の調査を行って、私たちの財産である「遺跡」の内容を記録するため、土器や石器などを発掘しました。

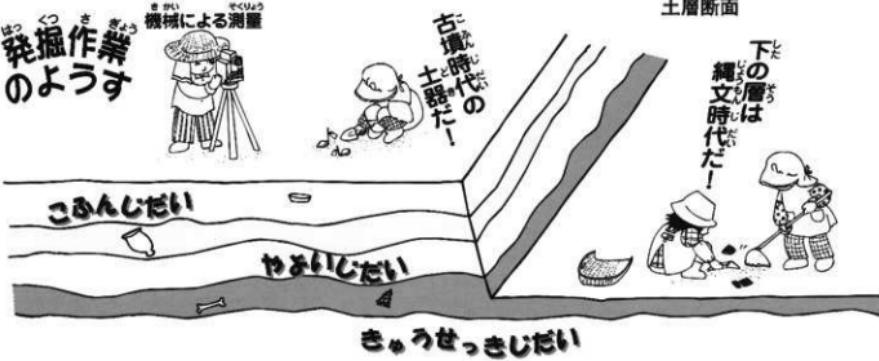
発掘調査の基本

右の写真は、遺跡の土壟断面です。色の違う土が何枚も重なっているのが判ります。土の色の違いは、土が堆積した時代によって変わり、発掘はこの色の違う土層ごとに調査を行います。この土層は、下のものほど古く、上の土層になるにつれ新しくなる特徴があります。したがって、各土層に含まれる土器・石器・住居跡の時代の新旧関係も、土層の重なりを見れば一目瞭然というわけです。石原遺跡・矢房遺跡では、旧石器時代～中世までの9枚もの土層が確認されました。このように多くの時代が重なって発見される遺跡は「複合遺跡」と呼ばれ、非常に珍しく貴重な遺跡です。



土壟断面

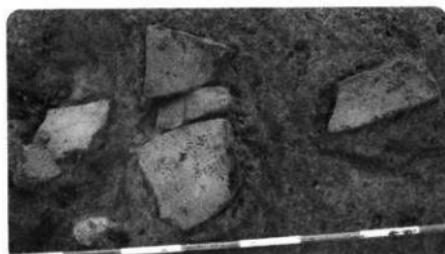
発掘作業のようす



した しゃしん はっけん なが せき やく ねんまつ つく こくようせき
下の写真は、発見された長さ 5cm ほどの石器で、約20,000年前に作られたものです。黒曜石と
よ 呼ばれるガラス質の石で作られており、ナイフや槍先として使用されたと考えられます。この黒
ようせき しまばねはんとう そんざい ながきせきんまつうらし きがほんい まりり こくようせきさんち はこ
曜石は島原平野には存在せず、長崎県松浦市や佐賀県伊万里市などの黒曜石産地から運ばれたもの
のです。直線距離で50km以上はなれた場所で、徒歩しか移動手段のなかった旧石器人にとっては、
たいへん くうじゆ つく せき さき こくようせきさんち じん
大変な労力をして作った石器でしょう。



石原遺跡・矢房遺跡からは、約8,000年前（縄文時代早期）の土器や石器が多く出土しています。写真は発見された土器です。発掘調査で出土するこの時代の土器は、ほとんどが割れてしまつて、バラバラの状態で発見されるものばかりです。また、接合作業を行っても完全な形に復元されることは非常にまれです。8,000年という時の流れの中で古代人の歴史の大部分が失われてしまっています。したがって、どんなに小さな土器片・石器でも貴重な資料であり、見逃すことは出来ません。小さな土器片からも時代や当時の生活がわかるからです。



発見直後の縄文土器

セコウ
接合してみると



完全な形には復元できない



縄文時代の台所用品(調理具:土器は復元品)

※石臼・すり石はドングリなどをすりつぶす道具



(上の写真的土器本当はこんな形)

豆知識 縄文土器の文様

縄文土器といえば、「縄」を使って文様を付けている】と思われるがちですが、九州では「縄」以外の文様のほうがむしろ主流です。貝殻や木の棒に文様を掘り込んだものを押し当てたり、指の爪なども使って多彩な文様をつけています。右の写真は「貝殻」と「木の棒」による文様の復元です。発掘で出てくる土器には驚くほど精巧な文様がつけられており、縄文人の美的感覚にはいつも驚かされます。皆さんも実物を見に発掘現場へ足を運んで見ませんか。



やふきいせき こふんじだい
矢房遺跡の古墳時代住居跡



①



②



③

①矢房遺跡住居跡の発見状況 ②住居跡の土器・石器出土状況
③住居跡から出土した土器(壺、壺、高壺などさまざま)

矢房遺跡では古墳時代(約1,500年前)の住居跡が発見されました。その床面から大量の土器片が出土しました。(①・②)住居跡から出土した土器片を接合復元すると、当時利用されていた器の種類がはっきりしてきました。煮炊きをするための壺、水や酒など液体を貯蔵しておく壺、食べ物を盛る壺・高壺などがあります。煮炊きをするための壺は、表面にススが付いており火にかけられていたことが考えられます。これらの土器は当時の様子を知る上で貴重な資料です。



○器の容量を計算してみました。

壺①: 約3.61㍑(高さ23cm) 壺②: 約4.81㍑(高さ26cm)

壺: 約0.561㍑(小は約0.31㍑) 高壺: 約0.51㍑

現代との比較: (マグカップ0.21㍑・汁椀0.21㍑・どんぶり0.51㍑)

*出土した土器に水を入れて漬ることはできませんので、おおよその計算値です。



高壺

壺(小)

壺

さて、現代使用されているご飯茶碗なんかの容量と比べてみると、当時の食卓の様子が理解しやすいのではないでしょうか。壺は現在と同じように一人用の器があって、高壺などは共同で利用していたのかもしれませんね。そして壺では込み料理が作られ、水分がしみ込みにくい木製の器(腐食しやすいので出土することはまれです)で味わっていたのかもしれませんね。

←左の写真のように豊かな食卓だったかもしれませんね。

① 墨で文字を書く（墨書き：ぼくしょ）



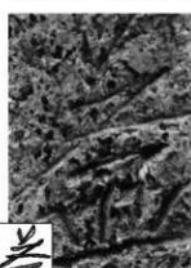
石原遺跡出土墨書き土器「宮」



石原遺跡出土墨書き土器「宮」？

奈良時代（約1,300年前）には、役所で文字が使用され行政事務が行われていました。国見町内でも墨を使い筆で漢字が書かれている土器が出土しています。紙や木簡は腐敗しやすく、なかなか発見されませんが、まれに遺跡から表面に文字が書かれた土器が出土することがあります。石原遺跡でも「宮」と書かれた土器片（左写真2枚）が出土しています。

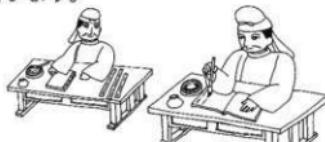
② 文字を刻む（刻書き：こくしょ）



石原遺跡出土刻書き土器「益」

同じく文字に関わる出土品ですが、こちらは墨や筆を用いずに、小刀や竹べらなどの先端で文字が刻まれた土器片です。土器を焼成する前に刻まれています。土器の底面外側に刻まれており、墨書き土器も底面外側に書かれています。そのため土器を伏せた状態で文字が書かれていることがすぐにわかります。「益」と判読でき、対岸の熊本県にあった「益城郡」などとの関連が指摘されています。

③ 役所のようす

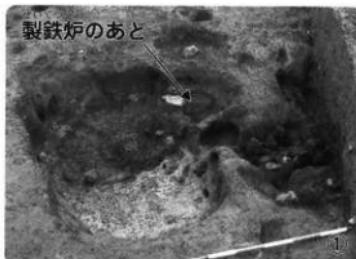


《キーポイント》

文字は役所などの行政的な場面で主に使用されており、石原遺跡周辺には役所と呼ばれるような施設があったことが想定できます。島原半島の中心的な役所とも考えられます。

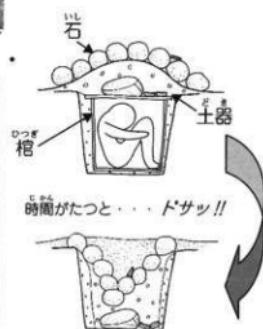
てつ ① 鉄をつくる（製鉄：せいてつ）

現在、鉄製品は生活のいろいろな場面で活躍しています。石原遺跡では、中世（約800年前）に鉄をつくる（精錬して）いた炉のあとが発見されました（写真①）。ふいご（送風機）を使って、炉の中で鉄鉱石や砂鉄と木炭を高温で溶かし、鉄を精錬します。そのとき、鉄滓（てっさい：かなくぞ）という「かす」が出ます。石原遺跡では鉄滓も大量に出土しています。



② 中世のお葬式

中世（約800年前）のお墓が矢房遺跡で発見されました。深さ50cm、長さ85cm、幅50cmの大きな穴です。大人が手足を伸ばして寝ることができないサイズで、幼児が葬られたのでしょうか。供えられた土器（小さな皿6枚）は穴の中に落ち込んで出土しています。お墓の上には人の頭などの石がいくつもおかれていました。出土した小さな皿には、口の辺りにススが付いており、油（菜種など植物製油）を入れて火をつけ「明かり」として利用していたようです。



国見町遺跡地図



遺跡の概要
地図中央部の点字下線は遺跡「鬼の城跡」で、その周辺に分布する多くの遺跡が示されています。また、北側に位置する「御殿山古墳」は昭和30年に当地に大規模な開発が実施されました。その際に古墳は破壊され、現在はその跡地として残っています。



遺跡の概要
地図中央部の点字下線は遺跡「鬼の城跡」で、その周辺に分布する多くの遺跡が示されています。また、北側に位置する「御殿山古墳」は昭和30年に当地に大規模な開発が実施されました。その際に古墳は破壊され、現在はその跡地として残っています。

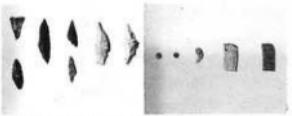
国見町遺跡地図と石碑

地図中央部は、国見町の矢頭遺跡を主とした複数の跡地で、跡地群の東側には矢頭遺跡が複数存在しています。矢頭の最奥部には奈良時代(180年-750)に建立されたとされる、門内に高さ3m程の石塔群の跡地群が2列になって約80mほど延びています。門内内部にはここを記念して立てられた碑が2枚あります。



國見町のヒカラ寺

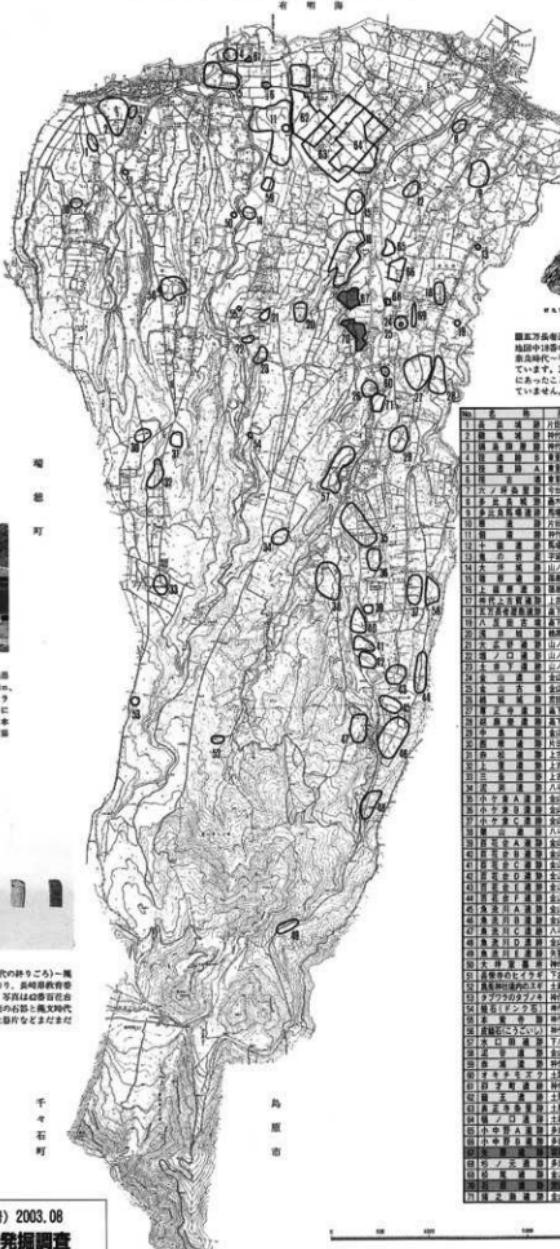
国見町小原のヒカラ寺は、平成7年4月10日の岡山県自然愛護協会の調査結果によると、奈良時代の寺跡、伽藍、塔頭、井戸等が確認されました。塔頭の柱頭は、その直径であります。塔頭や柱頭にかけているように見えますが、塔頭の柱頭は問題ないそうです。本木は跡地で、昭和60年5月20日に実測記念物として国の選定を受けています。



国見町遺跡の石碑 (長崎県教育委員会所蔵)

地図39-44番の百石遺跡群は、370年春(古墳時代の葬りごろ)一萬文、後世時代における通路として全く間に残らせており、長崎県教育委員会や岡山市社文化などにより発掘調査が行われました。写真は40番百石D遺跡から出土したので、印石(石器時代の住居・狩猟用の石器)と飛鳥時代の墓具等です。遺跡調査では、このような名前や出土品などまだまだ多く発見することができるのです。

千
々
石
町



国見町発掘調査速報 (第2号) 2003.08

石原遺跡・矢頭遺跡の発掘調査

発行日 2003.8.1

発行/国見町教育委員会

長崎県南高来郡国見町土塙甲1079

TEL. 0957-78-1100

印刷/(株)昭和堂

★この遺跡地図は、平成14年3月版のもので、まだまだ多くの未発見・未開拓の遺跡が存在しています。

★この遺跡地図は、平成6年3月長崎県教育委員会発行の「長崎県遺跡地図」を基礎として、その後見つかったもので、矢印等を付けて、国見町の現状を示したもので。

※地図は現状を示したもので、上記のものと現状を異にするもので、地上やその周辺も遺跡と考えられる場合があります。また、図上に示していない地域でも、歴史的な名跡や古墳・古跡等によってその地域において文化財を保護する土地として広く認められている土地についても遺跡として取り扱われます。

★この遺跡地図について詳しくは、国見町教育委員会までお問い合わせください。